

声に出して読む万葉集 第四十三回

旅に棲む伝説歌人 高橋虫麻呂 其の三

卷九 雜歌

一七五三

〔題詞〕 檢稅使大伴卿が筑波山に登る時の歌一首〔并短歌〕

〔原文〕 衣手 常陸國 二並 筑波乃山乎 欲見 君來座登 热尔 汗可伎奈氣 木根取 嘯鳴登 峯上
乎 公尔令見者 男神毛 許賜 女神毛 千羽日給而 時登無 雲居雨零 筑波嶺乎 清照 言借石
國之真保良乎 委曲爾 示賜者 歡登 紐之緒解而 家如解而曾遊 打靡 春見麻之從者 夏草之
茂者雖在 今日之樂者

〔訓讀〕 衣手 常陸の國の 二並ぶ 筑波の山を 見まく欲り 君來ませりと 暑けくに 汗かき嘆げ
木の根取り うそぶき登り 峰の上を 君に見すれば 男神も 許したまひ 女神も ちはひたま
ひて 時となく 雲居雨降る 筑波嶺を さやに照らして いふかりし 国のまほらを つばらか
に 示したまへば 嬉しみと 紐の緒解きて 家のごと 解けてぞ遊ぶ うち靡く 春見ましゆは
夏草の 茂くはあれど 今日の樂しさ

▽語釈

檢稅使大伴卿||檢稅使は、諸国に蓄積された正税を検査するために中央から派遣された令外官。大伴卿は、大伴旅人と考えられている。

衣手||袖を水に浸す意から、地名「常陸」にかかる枕詞。『常陸國風土記』に「常陸」の名前の由来に、ヒナラスノミコトが泉の水に衣の袖を沾ぢて、漬す義によつて、この国の名と為すとある。

二並ぶ筑波の山||筑波山は男神と女神の高低二つの峰からなる靈山であつた。

うそぶき||口をすぼめて息を吹き、音を出す。

ちはひ||チは靈力、ハヒはそれの働く意。威力で助ける。加護する。
時となく||いつという時を定めずに。ひつきりなしに。

雲居||空。

さや||清々しいさま。

いふかり||様子を見たいと思う。

まほら||マは接頭語。ホは稻の穂・国の秀などのホ。ラはイヅラ・コチラのラで、漠然と場所を示す接尾語。すぐれた所。

つばらかに||まんべんなく。くまなく。

うちなびく||草木の枝葉がもえ出、伸びて靡き繁るので「春」にかかる枕詞。

見ましゆ||ユは比較の基準を示す。⋮よりは。

夏草の||「しげく」にかかる枕詞。

一七五四 反歌

〔原文〕 今日尔 何如将及 筑波嶺 昔人之 将来其日毛

〔訓読〕 今日の日にいかにかしかむ筑波嶺に昔の人の來けむその日も

▼注釈

古来、筑波の山は坂東諸国の男女が、春の花、秋の黄葉を愛でて遊樂する山であった（『常陸國風土記』筑波郡）

一七五五

〔題詞〕 霍公鳥を詠める一首「并短歌」

〔原文〕 鶯之 生卵乃中尔 霍公鳥 獨所生而己父尔 似而者不鳴 己母尔 似而者不鳴 宇能花乃
開有野邊從 飛翻 来鳴令響 橘之 花乎居令散 終日 雖喧聞吉 幣者將為 遷莫去 吾屋戸之花
橘尔 住度鳥

〔訓読〕 鶯の 卵の中に 霍公鳥 獨り生れて 己が父に似ては鳴かず 己が母に似ては鳴か
ず 卵の花の 咲きたる野辺ゆ 飛び翔り 来鳴き響もし 橘の 花を居散らし ひねもすに 鳴
けど聞きよし 賄はせむ 遠くな行きそ 我が宿の 花橘に 住みわたれ鳥

一七五六 反歌

〔原文〕 搖霧之 雨零夜乎 霽公鳥 鳴而去成 □怜其鳥

〔訓読〕 かき霧らしき雨の降る夜をよ霍公鳥ほとときす鳴きて行くなりあはれその鳥

かき霧らしきカキは接頭語で、一面に・・になる意。一面にくもらす。

▽語釈

一七五七

〔題詞〕 筑波山に登りし歌一首〔并短歌〕

〔原文〕 草枕 客之憂乎 名草漏 事毛有哉跡 筑波嶺尔 登而見者 尾花落 師付之田井尔 噎泣毛
寒来喧奴 新治乃 鳥羽能淡海毛 秋風尔 白浪立奴 筑波嶺乃 吉久乎見者 長氣尔 念積來之
憂者息沼

〔訓読〕 草枕 旅の憂へを慰もることもありやと 筑波嶺につくはね登りて見れば 尾花散るをばな 師付の
田居たゐに 雁がねも 寒く來鳴きぬにいぱり 新治の 鳥羽の 淡海も 秋風に 白波立ちぬ 筑波嶺の よけく
を見れば 長き日けに 思ひ積み來し 憂へはやみぬ

▽語釈

尾花ススキの花穂。

師付千代田町志筑筑波嶺の地。國府のあつた石岡市西すぐ近く。

田居田のある所。田んぼ。

鳥羽の淡海茨城県真壁郡明野町から関城町、下妻市にかけての一帯にあつた湖。

よけくよいこと。

一七五八 反歌

〔原文〕 筑波嶺乃 須蘇廻乃田井尔 秋田苅 妹許将遣 黄葉手折奈

〔訓読〕 筑波嶺の裾廻の田居に秋田刈る妹がり遣らむや黄葉手折すそみらな

〔題詞〕 筑波嶺に登りて燭歌會を為る日に作る歌一首〔并短歌〕

〔原文〕 鷺住 筑波乃山之 裳羽服津乃 其津乃上尔 率而 未通女へ壯カガヒ士之 往集 加賀布燭歌尔
他妻尔 吾毛交牟 吾妻尔 他毛言問 此山乎 牛掃神之 徒來 不禁行事叙 今日耳者 目串毛勿
見 事毛咎莫 「燭歌者東俗語曰賀我比」

〔訓讀〕 鷺の住む 筑波の山の 裳羽服津の その津の上に 率ひて 娘子壯士の 行き集ひ かが
ふかがひに 人妻に 我も交らむ 我が妻に 人も言問へ この山を うしはく神の 昔より 禁イサ
めぬわざぞ 今日のみは めぐしもな見そ 事もとがむな 「燭歌は、 東の俗語に賀我比カガヒ
ト

曰ふ】

▽語釈

裳羽服津アマハフツ|| 所在未詳。筑波山周辺の津か。

率ひ|| 声をかけて誘い連れだつ。

かがひ|| 力キ（懸）アビ（合）の約。男女互いに掛け合いで歌を歌う意。
言問ひ||（求婚の）言葉をかける。

うしはき|| ウシは主人、ハキは佩く意。（土地などを）主として持っている。領する。
めぐし|| いたわしい。見るに堪えない。かわいそうだ。

一七六〇 反歌

〔原文〕 男神尔 雲立登 斯具礼零 沾通友 吾将反哉

〔訓讀〕 男神ヒコカミに雲立ち上りしぐれ降り濡れ通るとも我れ帰らめや

〔左注〕 右の件の歌は、高橋連蟲麻呂歌集の中に出づ。

相聞

一七八〇

〔題詞〕 鹿嶋郡の荔野橋カシマノコホリにして大伴卿に別れし歌一首〔并短歌〕

〔原文〕 牝牛乃 三宅之へ滷ル尔 指向 鹿嶋之ヘ崎シマ 小丹塗之 小船儲 玉纏之 小棍繁貫 夕塩之 滿
乃登等美尔 三船子呼 阿騰母比立而 喚立而 三船出者 濱毛勢尔 後奈ヘ美ミ居而 反側 戀香裳
将居 足垂之 泣耳八將哭 海上之 其津乎指而 君之已藝歸者

〔訓讀〕 ことひ牛の 三宅の潟に さし向ふ 鹿島の崎に さ丹塗りの 小舟を設け 玉巻きの
小楫繁貫をかぢしじぬ 夕潮の 満ちのとどみに 御船子ゆふしづ を 率みつなこひたてて 呼びたてて 御船出みふねいでなば 浜も
狭せに 後れ並み居て こいまろび 恋ひかも居らむ 足すりし 音のみや泣かむ 海上うなかみの その津
を指して 君が漕ぎ行かば

▽語釈

ことひ牛コトヒ = 「ことひ」は、コト（殊）オヒ（負）の約。特に重い荷を背負う牡牛。「ことひ牛」
は、特牛が稻などの貢ぎ物を屯倉に運ぶことから、地名「三宅」にかかる枕詞。

三宅の潟ミヤケノツカ = 千葉県銚子市三宅町の海辺。

差し向かひシナカヒ = 面と向かう。

鹿島の崎カシマノシマ = 茨城県鹿嶋郡の南端、波崎町。

とどみトドミ = トトはタタヘ（湛）のタタの母音交替形。一杯に満ちた潮合。

こいまろびコイマロビ = 「こい」は倒れて横になる。

海上ウナカミ = 千葉県にあたる上総国にも下総国にも海上郡があるが、鹿島から目指すという場合は後者
(銚子市と現海上郡) であろう。

一七八一 反歌

〔原文〕 海津路乃 名木名六時毛 渡七六 加九多都波二一船出可為八

〔訓讀〕 海つ道のなぎなむ時も渡らなむかく立つ波に船出すべしや

〔左注〕 右の二首は、高橋連蟲麻呂の歌集の中に出づ。

挽歌

一八〇七

〔題詞〕

勝鹿カツシカの真間ママの娘子をとめを詠よみし歌一首「并短歌」

〔原文〕 鷦鳴 吾妻乃國尔 古昔尔 有家留事登 至今 不絶言来 勝壯鹿乃 真間乃手兒奈我 麻衣
尔 青衿著 直佐麻乎 裳者織服而 髮谷母 搓者不梳 履乎谷 不著雖行 錦綾之中丹裏有 齋兒
毛 妹尔将及哉 望月之 滿有面輪一如花 哭而立有者 夏蟲乃 入火之如 水門入尔 船已具如
久 歸香具礼 人乃言時 幾時毛 不生物呼 何為跡歟 身乎田名知而 浪音乃 驟湊之 奥津城尔
妹之臥勢流 遠代尔 有家類事乎 昨日霜 将見我其登毛 所念可聞

〔訓讀〕 鷦が鳴く 東の国に 古へにありけることと 今までに 絶えず言ひける 勝鹿の 真間
の 手兒名が 麻衣に 青衿着け ひたさ麻を 裳には 織り着て 髮だにも 搓きは 梳らず 脘をだ
には かず行けども 錦綾の 中に包める 斎ひ子も 妹にしかめや 望月の 足れる面わに 花
のごと 笑みて立てれば 夏虫の 火に入るがごと 港入りに 舟漕ぐごとく 行きかぐれ人の
言ふ時 いくばくも 生けらじものを 何すとか 身をたな知りて 波の音の 騒く港の 奥城に
妹が臥やせる 遠き代に ありけることを 昨日しも 見けむがごとも 思ほゆるかも

▽語釈

真間＝千葉県市川市真間の地。

鷦が鳴く＝地名「あづま」にかかる枕詞。東国の言葉が分かりにくく鷦が鳴くように聞こえたから。

手兒名＝上代東国方言。ナは愛称の接尾語で、ラの転。少女。

麻衣＝麻布で作った着物。粗末な衣。

青衿＝青いえり。

ひたさ麻＝ヒタはまじりけのない意、サは接頭語。純粹な麻の糸。

斎ひ＝将来の幸福を願い、めでたい言葉を述べる。

足れる＝「足り」は条件を十分に満たし、過ぎもせず欠けもしない状態にある意。

行きかぐれ＝「かぐれ」は寄り集まる意。

たな知り＝タナはたしかに、しつかりの意。確かにわきまる。

奥つ城＝墓所。墓。

〔原文〕 勝壯鹿之 真間之井見者 立平之 水挹家武 手兒名之所念

一八〇八 反歌

〔訓読〕 勝鹿の真間の井見れば立ち平し水汲ましけむ手児名し思ほゆ

▽語釈

立ち平らし＝いつもそこに立つて、そこの所を踏んで平らにする。

【参考】 葛飾の真間の娘子については、巻三の四三一～三に山部赤人の長歌と反歌がある。

〔題詞〕 勝鹿の真間の娘子の墓を過ぎし時、山部宿祢赤人の作れる歌一首「并短歌」

いにしへにありけむ人の倭文幡の帶解き交へて 伏屋立て妻問ひしけむ 勝鹿の真間のが奥

つ城をこことは聞けど 真木の葉や 茂くあるらむ 松が根や 遠く久しき 言のみも名のみも我れは

忘らゆましげ（四三二）

我れも見つ人にも告げむ勝鹿の真間の手児名が奥つ城とゝろ（四三三）

葛飾の真間の入江にうち靡く玉藻刈りけむ手児名し思ほゆ（四三三）

一八〇九

〔題詞〕 菅原處女の墓を見し歌一首「并短歌」

〔原文〕 葦屋之 菅名負處女之 八年兒之 片生之時 従 小放尔 髮多久麻豆尔 並居家尔毛不所見
虚木綿乃 牢而座在者 見而師香跡 恼憤時之 垣廬成人之説時 智弩壯士 宇奈比壯士乃廬八
燎 須酒師競 相結婚 為家類時者 燒大刀乃 手穎押祢利 白檀弓 鞍取負而 入水火尔毛将入
跡 立向 競時尔 吾妹子之 母尔語久 倭文手纏 賤吾之故 大夫之 荒爭見者 雖生 應合有哉
宍串呂 黃泉尔將待跡 隱沼乃 下延置而 打歎 妹之去者 血沼壯士 其夜夢見 取次寸 追去祁
礼婆 後有 菅原壯士伊仰天 □於良妣 □地 牙喫建怒而 如己男尔 負而者不有跡 懸佩之小
劍取佩 冬□蘋都良 尋去祁礼婆 親射歸集 永代尔 標將為跡 遷代尔 語將繼常 處女墓 中尔
造置 壮士墓 此方彼方二 造族共置有 故縁聞而 雖不知 新喪之如毛 哭泣鶴鴨

〔訓読〕 葦屋の 菅原娘子の 八年子の 片生ひの時ゆ 小放りに 髮たくまでに 並び居る 家にも

見えず 虚木綿の 隠りて居れば 見てしかといぶせむ時の垣ほなす 人の問ふ時 茅渟壮士
菅原壮士の 伏屋焚き すすし競ひ 相よばひ しける時は 焼太刀の 手かみ押しねり 白真弓

鞍取り負ひて 水に入り 火にも入らむと 立ち向ひ 競ひし時に 我妹子が 母に語らく しつ
たまき いやしき我が故 ますらをの 争ふ見れば 生けりとも 逢ふべくあれや しあくしろ
黄泉に待たむと 隠り沼の 下延へ置きて うち嘆き 妹が去ぬれば 茅渟壮士 その夜夢に見
とり続き 追ひ行きければ 後れたる 菩原壯士い 天仰ぎ 叫びおらび 地を踏み きかみたけ
びてもころ男に 負けてはあらじと 懸け佩きの 小太刀取り佩き ところづら 尋め行きけれ
ば 親族どち い行き集ひ 長き代に 標にせむと 遠き代に 語り継ぎがむと 娘子墓 中に造
り置き 壮士墓 このもかのもに 造り置ける 故縁聞きて 知らねども 新喪のゞとも 哭泣き
つるかも

▽語釈

菩原＝和名抄の摂津国に「菩原 宇波良」と見える地。兵庫県芦屋市を中心とした地域。

片生ひ＝成長・発達の不十分なこと。

小放り＝ヲは接頭語。上代の少女の髪型。「うなゐ」（十二、三歳までの子どもの髪で、垂らした髪をうなじにまとめた形）の髪を成人して振分け髪に結い上げたもの。

髪たく＝タキは髪をかきあげる。

虚木綿の＝「隠」にかかる枕詞。かかり方未詳。

いぶせみ＝「見てしかと」（見たいものだと）心の中で苦しく思う。

垣ほなす＝垣をめぐらすような。ひどく噂を立てられるのにいう。

伏屋焚く＝「すすし」にかかる枕詞。粗末な家で火をたくと立つ煤ということから。すすし競ひ＝ 스스はスミ（進）のススと同根。進んで競り合う。よばひ＝言い寄る。求婚する。

手かみ＝剣の柄。

押しねり＝おさえひねる。

倭文たまき＝「いやしき」にかかる枕詞。

逢ふべく＝「逢ひ」は結婚する。

しあくしろ＝肉（し）を串に刺したうまい味、よい味がするので、同音の「黄泉」にかかる。

隠り沼の||見えない意で、「下」にかかる枕詞。

下延へ||シタは人に隠した心、ハエは延び広がせる意。人知れず思いを抱く。

菟原壯士い||イは主格の下につく補格の助詞で、強意を示す。

きかみ「牙噛み」||歯ぎしりする。

もころ男||自分と同じような男。自分の相手となる男。

かけはき||「かけ」はひつかけてさげる。「はき」は、太刀を身につける。

ところづら||トコロ芋の蔓。葉のあるうちに見当を付けておき、冬に蔓をたどつて掘り出すことから「尋め行く」にかかる枕詞。

このもかのも||こちら側とあちら側と。

一八一〇 反歌

〔原文〕 葦屋之 宇奈比處女之 奥柳乎 往來跡見者 哭耳之所泣

〔訓読〕 芦屋の菟原娘子の奥城おくつきを行き来くと見れば哭ねのみし泣かゆ

一八一一

〔原文〕 墓上之 木枝靡有 如聞 陳努壯士尔之 依家良信母

〔訓読〕 墓の上の木の枝靡えなびけり聞きしげと茅渟壮士にし寄りにけらしも

▽語釈

けらし||回想の助動詞ケリの連体形ケルに推量の助動詞ラシのついたケルラシの約。過去の推量を表す。⋮たらしい。

〔左注〕 右の五首は高橋連蟲麻呂の歌集の中に出づ。

【参考】 一八〇一～三に、田辺福麻呂が菟原娘子の墓を見て詠んだ歌がある。

〔題詞〕 葦屋處女の墓を過ぎし時、作れる歌一首「并短歌」

〔原文〕 古之 益荒丁子 各競 妻問為祁牟 葦屋乃 菰名日處女乃 奧城矣 吾立見者 永世乃 語爾為乍 後人 偕 尔世武等 玉梓乃 道邊近 磐構 作家矣 天雲乃 退部乃限 此道矣 去人每行因 射立嘆日 或人者 啼尔毛 哭乍 語嗣 倦繼來 處女等賀 奧城所 吾并 見者悲喪 古思者

哭乍 語嗣 倦繼來 處女等賀 奧城所 吾并 見者悲喪 古思者

〔訓讀〕 古の ますら壯士の 相競ひ 妻問ひしけむ 葦屋の 菰原娘子の 奧城を 我が立ち見れば 長き世の

語りにしつつ後人の 倦ひにせむと 玉梓の 道の辺近く 岩構へ 造れる塚を 天雲の そくへの極み この

道を行く人ごとに 行き寄りて い立ち嘆かひ ある人は 哭にも泣きつつ 語り継ぎ 倦ひ継ぎくる 娘子

らが 奥城処 我れさへに 見れば悲しも 古思へば

▽語釈

そくへ＝遠く離れたところ。

〔原文〕 古乃 小竹田丁子乃 妻問石 菰會處女乃 奥城叙此

〔訓讀〕 古の 信太壯士の妻問ひし菟原娘子の奥城ぞこれ

信太＝大阪府和泉市信太の地。

▽語釈

〔原文〕 語繼 可良仁文幾許 戀布矣 直目尔見兼 古丁子

〔訓讀〕 語り継ぐからにもここだ恋しきを直目に見けむ古壯士

▽語釈

ここだ＝こんなにはなはだしく。